

N-Pocket

多様な子どもの育ちを  
ささえる地域づくり支援事業

# 活動報告書

2022



令和4年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業(WAM 助成)

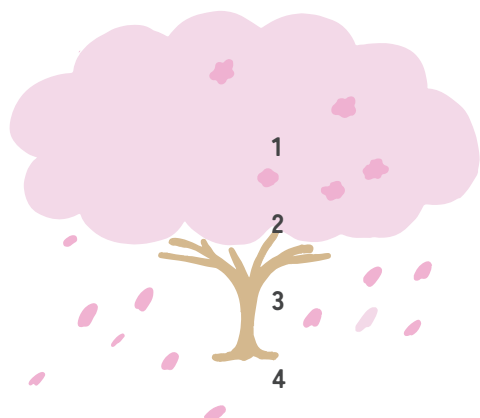
特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター(N-Pocket)



# もくじ

## 目次

・子どもの安心を支えよう！	1
・私たちの活動からみえてきたこと	2
・中間支援NPOの強みを生かした多様で総合的な支援	3
・浜松市の多様な子どもたちのための学習環境	4
・子どもの自尊感情を育もう「N-Pocketの訪問型学習支援」	5・6
・学習支援講師による講師会	7
	8



## 多様な子どもの理解向上セミナー：研修と交流の会

① ぼくたちの「らしさ」をキャッチできるかな (大隅 和子さん)	9・10
② 子どもがのびのび育つ場づくりとは? (石井 正宏さん)	11・12
③ 子どもの可能性は無限大 (茂木 厚子さん)	13・14

## ご近所あそびコーディネーター養成講座

① 集まれ!【地域×子ども】のために何かやりたい人 (萩原 建次郎さん)	15・16
② 誰もが遊べる「インクルーシブ公園」ってどんな場所?(龍円 あいりさん)	17・18・19
③ みんなで作るよ!1日だけの遊び場 -準備編- (塚本 岳さん)	19・20
④ みんなで作るよ!1日だけの遊び場 -実践編・おためしプレーパーク-	20・21・22・23
⑤ こんな場所なら関わりたい!コミュニティを育む公園 (木村 智子さん)	23・24

・子どもの居場所を考えるネットワーク委員会	25・26
-----------------------	-------

# 子どもの安心を 支えよう!



責任ある大人たちが繋がって、

子どもたちが自分の想いを

安心して伝えられる社会、

安心して居ることができる

社会をつくっていききたい



## 私たちの活動からみえてきたこと

2016年度に行った「貧困の子ども支援浜松はじめの一步連携事業」※の支援ネットワークの成果を活用しつつ、当法人では経済的困窮だけでなく様々な困難を抱えた子どもたちに寄り添う活動を継続してきました。



「訪問型学習支援」では、SSW(スクールソーシャルワーカー)から学校現場で気になる子どもの支援依頼が続いています。特に外国ルーツの子どもたちが抱える困難の背景を周りの大人も分析しきれず、特別支援学級や特別支援学校への進路を勧めるケースが散見されます。さらに働く大人たちの、まさに文字通り「忙」しい大人たちの時間のなさが、子どもの心の安定に響く問題として浮かび上がりました。

子ども自身のサンマ(三間:時間、空間、仲間)の不足の影響も大きいと感じ、子どもの遊びや公園に関わる浜松市との協働事業が複数年続き、子どもの居場所としての公園の可能性を共有できたことから、市の公園において、おためしプレーパークを開いてみました。そこでは、時間と空間と仲間が存在し、創造的な遊び場と化した現場で、デジタルゲームしか興味がないと決めつけられがちな子どもたちが、実は何をとり上げられてしまっているのか、何を必要としているのか、私たち大人たちが気づく機会となりました。



多様な子どもの育ちを支える地域づくり支援事業 担当

井ノ上 美津恵(総括・協働)

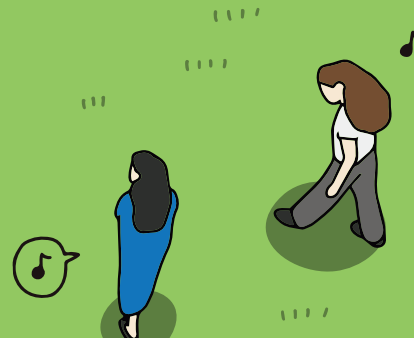
大野木 里美(副総括・学習支援)

松井 玲子(人材養成講座・委員会)

小木 薫(理解講座・事務)

大山 湧希(理解講座・交流会)

望月 真理子(学習支援)





# 中間支援NPOの強みを生かした 多様で総合的な支援

※「貧困の子ども支援浜松はじめの一歩連携事業(WAM 助成事業)」とそれ以後の活動内容

子どもの生活や活動範囲に合わせた多様で総合的にいける環境作りの必要性を感じ、WAM 助成金を得て、複数の団体に呼びかけ 2016 年度から「子どもの貧困浜松はじめの一歩連携事業」を開始しました。連携事業では、相談事業、学習支援、居場所づくり、フードバンクのパイロット事業を組み合わせました。その後 7 年間、訪問型の学習支援を核にして、子どもたちの困難を支えようと中間支援 NPO の強みを生かし、他団体とネットワークしながら活動を進めました。



# 浜松市の多様な子どもたちのための学習環境



## 困窮世帯の子どもたち・・・

2020年度に実施された浜松市子どもの貧困に関する実態調査調査報告書によれば、学校の授業の理解度について困窮判定別にみると、一般群では『わかる』は68.7%、『わからない』は29.4%、一方、困窮群は『わかる』47.5%、『わからない』47.0%とほぼ半々の割合となっていました。

親が学習塾に通わせているかについては、一般群(54.5%)と困窮群(33.6%)となり、20.9ポイントの差がありました。

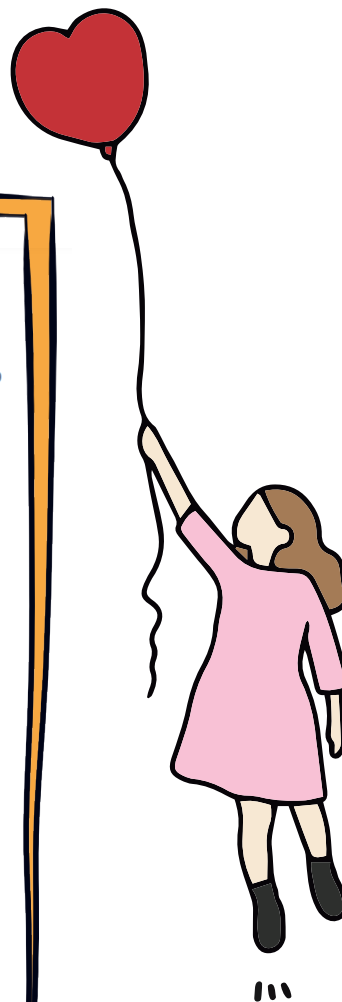
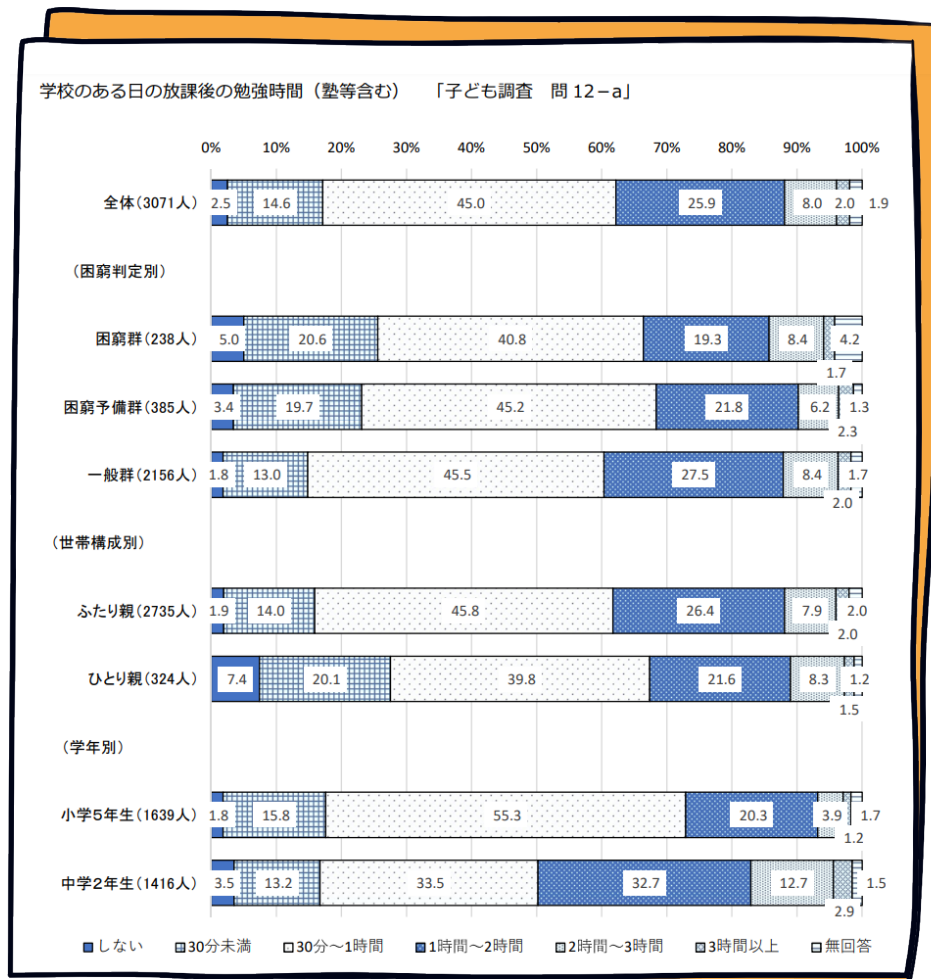
保護者の子どもに関する悩みについて、困窮群と一般群を比較すると、「学力」「進学・進路」の悩みは困窮群のほうが10ポイント以上高くなっていました。

こうした現状に対して、2022年度現在、市では学生・教員OB等のボランティアによる学習支援を行っています。対象は小学4年から中学3年までの子どもとしており、市内26会場で開く拠点型の教室を開いています。

\*浜松市調査有効回答数2,779人100%

- ・困窮群：等価可処分所得が中央値の1/2以下相当238人8.6%
- ・困窮予備群：等価可処分所得が中央値の1/2超3/4以下相当385人13.8%
- ・一般群：等価可処分所得が中央値の3/4超相当2,156人77.6%

## 子どもの貧困に関する実態調査



(2020年度浜松市子どもの貧困に関する実態調査)

外国ルーツの子どもたち・・・

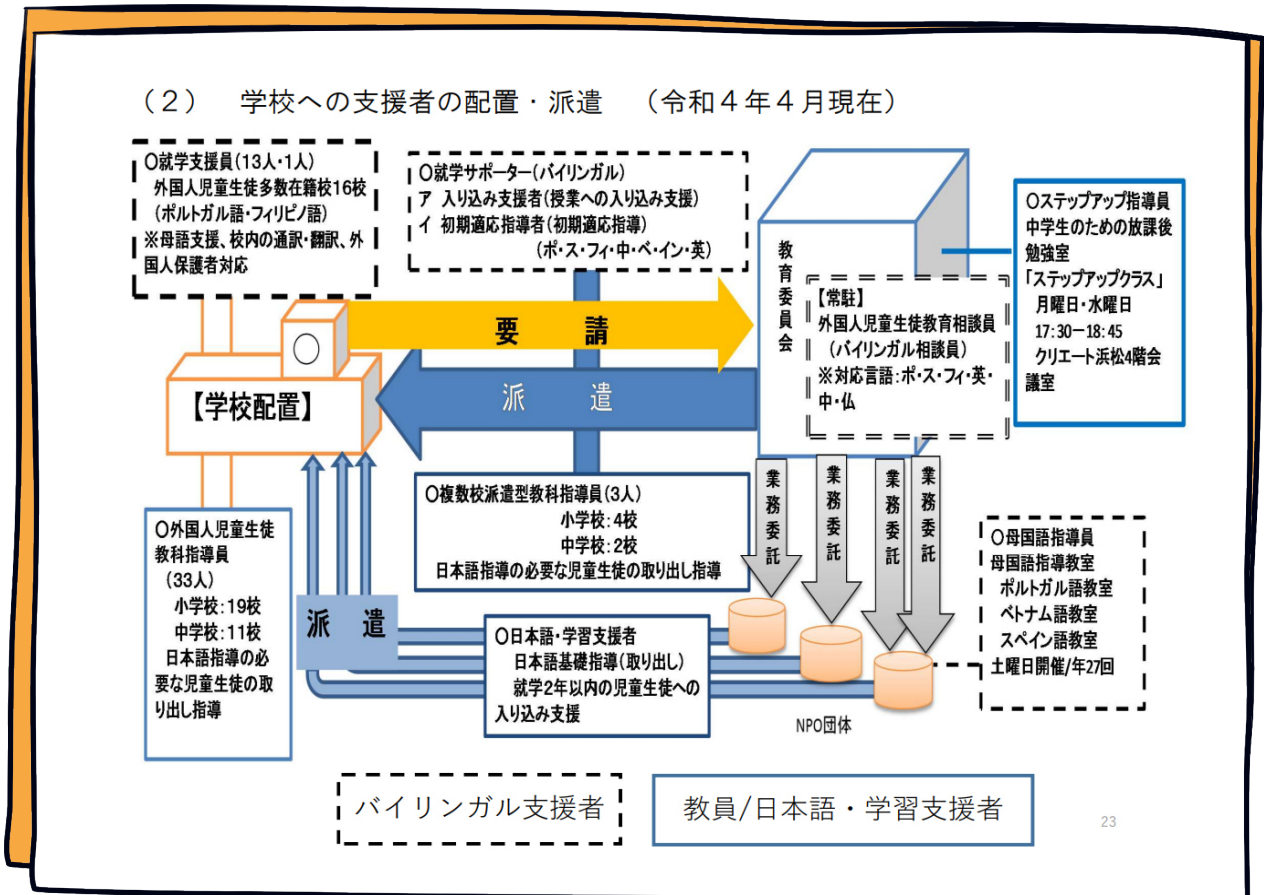
浜松市は在住外国人が多く、外国籍児童生徒数は2008年に1700人(全児童生徒に対し2.5%)まで増加、リーマンショック後減少していましたが、2015年から再び増加、2022年5月現在は1846人(3%)となっています。

外国籍児童の国籍はブラジルが5割近くを占め、次いでフィリピン、ベトナムの順となりますが、30か国にわたり、使用言語も24言語となっています。そうした子どもたちのうち、小学校1年生の外国籍児童は183人いますが、77%に当たる141人が日本生まれ日本育ちの子どもたちです。

また、入国や市外学校・外国人学校から編入・転入して就学した子どもは106人(2021年度)となりますが、その半数は日本語がわからず、初期適応指導を必要とする子どもでした。

こうした状況から浜松市もNPOも外国ルーツの子ども達の学習を先駆的な動きをもって支援してきています。しかし、言葉の問題だけでなく、ヤングケアラーの状況にある子どもや発達障害、愛着障害の疑いがある子どもたちもあり、その多様さにケアが追いついていない現実もあります。

(2) 学校への支援者の配置・派遣 (令和4年4月現在)



(浜松市教育委員会「外国人子供教育推進事業説明資料」2022/5/1より)

特別支援を必要とする子どもたち・・・

浜松市では、比較的早くから発達に関わる専門機関が用意されており、相談支援については比較的恵まれた環境だと言えます。

では、そうした子どものための教育環境はどうかというと、発達支援学級(特別支援学級)は、小学校96校のうち79.2%の76校に、中学校では48校のうち89.6%の43校に設置されています。また、学校内で通常の学級に在籍するものの特別に支援を必要とする子どものために設けられている発達支援教室は、小学校では70校に、中学校では37校に及びます。

こうした場では、例えばディスレクシアの子どもに対してデジタルツール等の導入なども行われるなど随分工夫がされるようになりましたが、通常級にいる様々な困難を抱えた子どもに関しては、その合理的配慮は十分でなく、それが理由で学校に行けなくなる子どもたちがいるのも事実です。例えば、宿題などの提出物を出すこと、忘れ物をしないことなどの当たり前とされてきたことは本当に当たり前なのか、大人たちはこうした困難を抱える子どもたちについての理解を進める必要があると感じています。

# 子どもの自尊感情を育もう 「N-Pocketの訪問型学習支援」



小学校4年生から16歳までの多様な困難(障がい、不登校、外国ルーツ、経済的貧困)を抱える子どもや若者を対象にし、個々の子どもがもつ課題に対して対応しやすいように、子どもの自宅または近隣の公共施設、当法人会議室を学習室とし、元教員など学習に関わる専門性や経験値の高い講師による訪問型学習支援を実施しました。

また、別事業で行うフードバンクで手に入る食料品も経済的困窮状況にある家庭に持っていきたり、ななめの関係を築いた講師が子どもと一緒に買い物に行ったりと、寄り添いの気持ちを通して子どもの人間関係の幅を広げる働きかけもすることができました。

## ●こんなことがありました

・家庭では、母が仕事で夕方から早朝は不在となる母子家庭。夕食となるカップラーメンを自分で買い、済ませることもありました。支援場所を顔見知りがある当法人事務所にしたことで安心できる地域の居場所が家庭のほかにも一つできたのではないかと感じています。また支援者が買い物同行をして、勉強面だけでは伺い知れない、買い物スキル・生活力を発見することになりました。このケースはSSWの働きかけで小学校でのケース会議が実現し、校長先生、教頭先生、担任はじめ計9名で情報の共有ができました。

⇒経済的事情や働き方の多様化で、家庭であっても一人ぼっちの時間が長い子どもの居場所や、短時間でも安心できる家族団らんが大切であることについて考えさせられました。これほど多くの大人が一人の子どもを気にかけているという事実があるので、本当は本人や母親もその支援会議の場にいられたらよかったかもしれません。

・昨年度、公立高校の受験に不合格となった外国ルーツの子どもを、今年度の受験に向けてサポートしました。入試面接時も緊張から日本語が出なくなってしまうこと、受験に向けてやる気が継続しないこと、バイトを始めたことで高校進学よりも容易に賃金を得ることへ心が傾いたこと、体調面でも不安定だったこと、中学の時に支援級にいたことが学習の遅れにつながったと思い込んでいることなど、複合的な問題がある中で、支援者が粘り強く伴走しました。母親は日本語ができず、母語を話す支援者への信頼も厚いものでした。

## ●学習支援事業規模(2022年4月~2023年2月)

・サポートした子ども:10人(小4~16歳)

・支援回数:264回(延324.5時間)

・学習支援講師:7人(スクールカウンセラー、元小学校教員、特別支援教室支援員、外国ルーツの支援員、元適応指導教室支援員、ICT教室主宰者)

⇒外国ルーツの子どもたちの進学支援については、言葉の問題を抱えていること自体、特別支援を必要としますが、障害があったりした場合などは支援者にとっても情報が集めにくいものです。学校関係者もそうした子どもたちへの進路ガイダンスが十分でないままで、当事者は何が何だか分からないという実態があります。そのため、外国ルーツの子どもたちのための特別支援進学ガイドブックが必要と思われます。

・不登校が続いていた中学生でしたが、得意なことはプログラミングだったので、本人に無理のない形でオンラインにてプログラミングの支援を行いました。

⇒主要五科目に限らない、得意を伸ばすことをきっかけに支援者との交流が始まりました。徐々に信頼関係が築かれています。家族以外、社会と繋がっていけるという安心感を得てもらえたいと思っています。

・父親の病気でほとんどを看病や家の手伝い、通訳代わりとして時間を取られ、勉強が進んでいなかった中学生でしたが、SSWの紹介があり、すでに実施している学習支援の場に加わる形で支援を始めました。

⇒SSWの活躍もあって、子どものためのこうなったらいいな環境整備ができました。学校現場は多忙を極めています。民間との協力体制が可能であることを先生方にも広く知ってもらいたいです。



# 学習支援講師による講師会

学習支援を受けている子どもたちはそれぞれに抱えている困難の現れや度合いは違いますが、共通している部分もあります。それぞれの子どもに対する講師はその対応について、悩みながら支援を継続しています。どんな支援課題があるのか、またそれに対する他の講師からの感想や意見の交換をしました。

さらに、学習支援講師でもあり、臨床心理士でもある伊藤真一さん(基礎屋代表)より、各事例についてアドバイスをいただく会を2回開きました。このことにより、訪問型学習支援に関わる悩みを講師一人が抱えるのではなく、共有することで互いの気持ちの整理と学びに繋げることができたと感じています。

- 実施日時 : (1回目)2022年9月23日(祝・金)14:00~16:00  
(2回目)2023年1月19日(木)15:00~17:00
- 会場 : 浜松市佐鳴台協働センター
- 参加者数 : (1回目)講師5名(アドバイザー含む)、スタッフ3名  
(2回目)講師7名(アドバイザー含む)、スタッフ3名

## ○講師が持った悩み

**なやみ** 学習支援というのに、成績に反映するようなサポートが十分できない。学習支援回数や時間の問題、本人のやる気の問題、そもそもの学力の問題が大きすぎて、どこから手をつけていいかわからないほどだ。

**ヒント!** 愛着障害とまでいけなくても愛着欠損と考えられる場合もあります。学習支援ではあるが、学習を使った寄り添いであり、大人への信頼や自尊感情の回復など、生活していく上で必要な力を少しでもつけていくことをまずはサポートするといいと思います。

**ヒント!** 褒められる体験が必要で、間違いの指摘をしない方がいい流れをつくることができます。

**なやみ** ネームカードをペーパーカッターで作っていたら、カッターを使いたいと子どもに言われた。一度に重ねて切るのは3枚までと約束したが、実際は約束を守らず、好き勝手に切っていた。つい「うそだったね」と言ってしまった。

**ヒント!** 子どもの興味関心を受け止めてあげたい、だけれど綺麗に切ってもらいたい、綺麗に切ったら褒めてあげたいと一度にたくさんを願ってつきあうのではなく、目的は一つにしておいた方がいいし、だまされるのも大切です。



**なやみ** 外国ルーツの16歳をサポートしていて、学習習慣をつけたいと思っているがうまくいかない。勉強は嫌いで、学習成果が上がらないが、実は療育手帳を持っている子どもであるのと同じようにしたらいいかわからない。

**ヒント!** 療育手帳をもっているなら、その検査結果がわかるといいです。書くのが苦手な子どもでも音からならわかるという子どももいたり、ゲームやカードを使えば理解が進んだりする子どもから、その子にあった学習方法を見つけることができます。

**なやみ** 高校入試を控えた外国ルーツの子どもの学習支援をしているが、耳から聞いて知識はあるのに日本語が読めないの、テストの問題自体が理解できず0点を回避することが難しい。

**ヒント!** LDの子どもだと合理的配慮によって適切な受検が可能です。外国ルーツの子どものための環境は整っていないのが残念です。



## 多様な子どもの理解向上セミナー 研修と交流の会

大人たちが子どもの育ちの環境を理解し、子ども自身の尊厳を守ることができる社会づくりをすることができるよう、多様な子どもの困ったを理解し、子どもの育ちを支える大人の役割、できることを学べる機会として3回の講座を開きました。セミナーを機会に参加者同士が繋がり、新しい活動が生まれ、その活動を支援できるきっかけの場として交流会を運営しました。



### 「枠にはめない」可能性を育む子どもとの関わりかた

## ① ぼくたちの「らしさ」を キャッチできるかな。

●キーワード：子育て、孤育て、自己覚知、マルトリートメント、アタッチメント

●目的：子どもの個々の育ちを理解し、枠にはまった見方をせず、子ども自身の可能性を伸ばす為の関わり方を考える。

- 実施日時：2022年6月26日（日）13：30～16：30
- 会場：浜松市市民協働センター 第1・2研修室
- 参加者数：12名（講座）、10名（交流会）
- 第一部講演会、第二部交流会＜アートワークショップと参加者交流＞
- 第一・二部講師：

**大隅 和子**（おおすみ かずこ）さん  
 中学・高校教員免許、教育カウンセラー、認定カウンセラー（全日本カウンセリング協議会）アートセラピー「こころいろ」、乳幼児造形遊びや、環境構成理論を基盤として、おもちゃ・環境・遊び・親と子のコミュニケーション支援、支援者研修など各方面で講師として活動中。「子育て支援」「支援者育成」に関する大学の非常勤講師、行政からの研修依頼も多い。



「枠にはめない」可能性を育む子どもとの関わりかた

# ぼくたちのらしさをキャッチできるかな。

特別講座  
2022  
6/26  
13:30-16:30  
定員20名  
入場無料

**第1部 講演会 13:30-15:00**  
 もって生まれた子どもの力を育む方法を一緒に考えます。  
 ●「こころいろう」。「この子は一匹から」のような決めつけ  
 ●無意識にしているマズルワークシステム（脳がもへる関わりかた）

**第2部 交流会 15:00-16:30**  
 アートセラピーで、認めあうことばや気持ちを体感します。  
 ●子どもへの関わりかたイメージを絵やに表現  
 ●作品を認め、言葉にだしあう  
 ●「作品の発表を」「発表かたを表現」による「受けしらの気づき」  
 「子どもに関わる枠に活かせること」等の意見交流

会場・問い合わせ先  
 特定非営利活動法人  
 浜松NPOネットワークセンター N-Pocket  
 〒432-8521 浜松市中区長橋3-52-23  
 電話/TEL 053-445-3717  
 メール/MAIL info@n-pocket.jp  
 https://npo-net.jp/7920000000000000000



## ●こんなお話でした

### 【第一部 講演会】

- ・地域とのつながりが希薄、核家族化、男性の長時間労働などの問題があり、子育てが「孤育て」になっていることが伺え、子どもを育てにくい時代といえる。
- ・親が離婚した時の子どもの年齢を確認すると一番多いのが0～2歳、子どもの他殺被害者の年齢は0歳時が最多である。
- ・子どもは「幼児期にたくさんかわいがられる」ことで自分と周囲を信頼するようになる。さらに、身体や情緒の安定、信頼関係、集中力や自己抑制力や抽象的思考といった、子どもが将来自立するために必要な自律する力となる。
- ・地域が変容し、核家族の中で成長してきた二世三世が、子育ての関わりをよく知らないままに子育てをし、自分がマルトリートメント（不適切な養育、避けたい子育て）を行っていること自体に気がついていないこともある。
- ・DV家庭に育つとPTSDやうつ・不安障害になりやすいなど、その後の健康に影響を強く及ぼすため、多職種が連携しアタッチメントの再形成をする必要が出てくる。

・接する大人側が、「どのように成長してきたかその過程を見つめること、今現在の自分自身をしること」＝「自己覚知」が大切で、マイナス面も含め受けとめることにより、子どもへの接し方がかわる。

・子どもの乳幼児だけでなくどんな時期でも、大人からの良い働きかけによって、良い影響を与えることができる。

### 【第二部交流会：アートワークショップ】

第一部の内容をふまえ、アートワークを通して自己覚知をし、他者を認めること・他者から認められることを体験しました。



## ●参加者の感想

### 【第一部 講演会】

- ・土台が大切、0歳から2歳までの関わり方が大変重要ということ、マルトリートメントを受けないことで将来のうつ病やアルコール依存、自殺が減ることが印象に残った。
- ・子どもの成長した姿について「自立」できる子、そのために「自律」が大事というお話にはとても共感できた。理想と現実のバランス感覚が私にとっては腑に落ちる内容で納得できた。自分が無理のないところで相手を受け入れる、という言葉が響いた。
- ・「自己覚知」が大切で、支援者自身が自分を知ること(マイナス面も含め)それを受けとめることご出来るようになりたいと思った。



### 【第二部 交流会】

- ・約束したのに子どもがそのことをやってないとき「〇〇してから〇〇して」と駆け引きしてしまうので、自分の心の中を知ろうと思った。
- ・幼児期の安心形成が大切なのに、実は自分が形成されていない事を再認識。マルトリートメントが家庭や学校で日常的にあると実感した。
- ・アートワークを初めて受けたが、とても興味深かった。自己覚知の一端を体験できたのかなと思う。他の参加者の絵や色も私にはない発想で刺激になった。子どものトピックにひっかかったの参加だったが、思いもよらぬ自分との出会いで、大変楽しい時間だった。
- ・いろんな手法を身につけるよりも自己認知がまず必要だとわかったので自分でもまたアートワークをしたいと思った。
- ・感情が先走ってしまった所があったが、それも大事な事だと思った。自分をもっと大事にしたい、もっとよく内面をみたいと思った。
- ・子どもに何かする前に、自分の内面を見つめ直すこと。自分はどんな色眼鏡で子どもを見ているのだろうと常に頭の片隅に置いておくことがとても大切だと思った。

生きづらさを感じている子どもに  
「どう関わる?」「どうつながる?」

## ② 子どもがのびのび育つ場づくりとは?

○キーワード：校内居場所カフェ、文化資本、社会関係資本、信頼貯金、サードプレイス、地域の大人

○目的：学校の中で生きづらさを感じている子どもたちの、個々の環境を理解し、子ども自身にあった接し方や関わり方を考える

■実施日時：2022年8月7日（日）13：30～16：30

■会場：浜松市市民協働センター 第1・2研修室

■参加者数：24名（講座）、12名（交流会）

■第一部講演会 会場+オンライン

講師：石井 正宏（いしい まさひろ）さん

社会に出づらい若者の宿泊支援寮を運営するNPO法人で約10年間の支援を経験。2009年に起業し(株)シェアするココロ設立。2015年にNPO法人パノラマを設立。主に高校生の予防的支援に取り組み、有給職業体験イベントを立案。校内居場所カフェ等で活動している。



■第二部交流会くサポート団体の活動報告と参加者交流>

第二部交流会登壇者：

・NPO法人ドリームフィールドスタッフ 池上 千絵さん  
フリースクール「ドリームフィールド」と卒業後の社会参加支援のための就労継続支援A型・B型の事業所がある。

・一般社団法人里山題楽校代表 鈴木 浩之さん  
里山集落内に開校。平日は、フリースクール/サポート校として、週末はカウンセリングルームとして機能する。

・市民立小中一貫校つらぬき楽園代表 箕島 淳子さん  
教育機会確保法の趣旨に沿い「地域立小中一貫校 瀬戸ツクルスクール」を参考に運営。主に小学校低学年が対象で週3日活動。自分で感じ取え、行動を選択できることを目指す。



学校の中で、  
生きづらさを感じている子どもに  
「どう関わる?」「どうつながる?」

### 子どもが のびのび育つ 場づくりとは?

多様な子どもたちを理解するセミナー②

**8月7日** 入場無料

■ 浜松市市民協働センター 第1,2研修室 (定員66)

■ 予約受付先 浜松市市民協働センター 予約センター

■ 定員 20名 ■ 対象者 子ども支援者、学校関係者、保護者

■ 第一部 講演会 13:30-15:00

・あの子のままに育てる場所、受け入れられる場所とは?  
【個性しなれない子ども? どう関わる? どうつながる?】  
自分のことを語るまで、周囲の人ができることは?

■ 第二部 交流会 15:00-16:30

・活動の支援グループによるパネルディスカッション  
・オルタナティブスクール つらぬき楽園  
・一般社団法人 里山題楽校  
・NPO法人 ドリームフィールド

■ 主催 問い合わせ先  
認定NPO法人  
**浜松NPOネットワークセンター**  
(〒432-8021 浜松市中区佐鳴台3-52-23)

電話/FAX: 053-445-3717

Web: <https://forms.gle/ReFMTYU8z5PJRwh7>

学校にいると...  
震れる...  
なんかわからないけど不安...  
本音、かっこ悪くて言えないや...

そんな生きづらさをもつ子の場づくり  
について<sup>①</sup>交流会で一緒に考えます。

講師紹介 | 石井正宏 いしい まさひろさん  
(NPO法人パノラマ 代表理事)  
活動にまつい様への相談支援を推進するNPO法人で約10年間の支援を経験。2009年に起業し(株)シェアするココロを設立。2015年にNPO法人パノラマを設立。  
全国で活動する予防的支援に取り組む、有給職業体験イベントを立案、校内居場所カフェの運営を通して、浜松市立学校「つらぬき楽園」を運営、活動している。

次回も  
あるよ!

多様な子どもたちを理解するセミナー①  
講師：クリスティ 英樹  
講師：茂木麻子さん  
日時：10月9日（日）13:30-16:30

メールアドレス: [info@n-pocket.jp](mailto:info@n-pocket.jp)

QRコード

①氏名 ②住所 ③連絡先 ④電話番号/メールアドレス ⑤所属 ⑥講師への質問ご記入をお願いします。  
協賛：浜松市役所 浜松市市民協働センター 社会福祉協議会 浜松市立学校 静岡県立大学 静岡県立浜松女子大学 静岡県立浜松北高等学校 静岡県立浜松南高等学校 静岡県立浜松西高等学校 静岡県立浜松東高等学校 静岡県立浜松南高等学校 静岡県立浜松北高等学校 静岡県立浜松西高等学校 静岡県立浜松東高等学校

### ○こんなお話でした

#### 【第一部 講演会】

- ・神奈川県では多様な入試制度により高校進学率は高いが、進学後の教育は適格者主義（義務教育でないので学ばないなら辞めてもよい）である。学校から排除され中退となった子どもは、やがて社会からも排除されがちになる。「（大人たちにとって）困った生徒は（本人自身が）困っている生徒である」。
- ・学校中退、進路未決定、早期離職は社会的孤立に陥りやすい。「困ってからの支援」は限界がある。まだ困っていない、これから困りそうな人々への予防的支援が必要である。
- ・学校の先生は皆大学を卒業し教員試験に合格した一つの階層の人たち。そうしたモノトーンとも言える先生や親以外の大人たち（多様なロールモデル）に出会うことが大切だ。
- ・文化のシャワーは浴びれば浴びるほど人とのつながりのフックが多くなるが、生活保護世帯は物事を知る体験（文化資本）が十分なされないため、人とのつながり（社会関係資本）のきっかけを得にくい。日本は島国で単一民族だから誰もが経験することを経験していないと弾き飛ばされやすい。こうして貧困が連鎖してしまう。
- ・潜在的な課題のうち子どもたちは相談に行かない。潜在的な課題を顕在化して初めて課題解決のための相談ができる、ここが重要なポイントになる。



・地域の多様な大人たちにも出会え、ゆかたパーティなど文化のシャワーも用意された校内居場所カフェは、誰でも来られるポピュレーションアプローチが入り口になった新しい形の教育相談とも言える。この校内居場所カフェで信頼貯金がたまり、個別の相談に移ることができる。

・先生と生徒というように互いの役割が固定している学校（2nd Place）で、支える人が支えられる人になったりと役割がシャッフルする校内居場所カフェ（3rd Place）には、教えたがり屋、関わりたがり屋、知りたがり屋のさんがりやは無用だ。



### ● 第二部交流会<サポート団体の活動報告>

3団体がそれぞれの活動について紹介しました。その後、グループに分かれて子どもとの向き合い方について話し合いをしました。

「学校に行くだけが答えではない。学校の中の居場所と平行して地域の中の居場所をどう作っていくかも進める必要がある。3rd Placeと言わずとも、その時の気分で選べるような場所を発展させられるといい。」



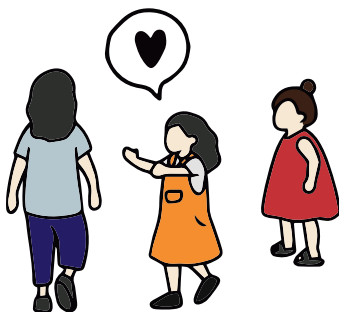
### ○参加者の感想

#### 【第一部 講演会】

・中学から高校や就職につながらなかった方への支援が難しいと聞いていたが、それを防ぐ方法として校内に居場所カフェがあるというのはとても良い。貧困の連鎖がある中で、頼りになる大人との出会いは宝になる。そういう大人に私もなりたい。

・学童では専門機関との繋がりがほぼなく、支援員の知識の中で支援するしかない状態で、研修は必須ではない。専門性よりも関係性が大事だと聞いた時、少し心の荷がおりた。知識がない中でも関係性を作ることは自分でもできると思った。少しずつ知識をつけ、大好きな子どもたちが安心して過ごせるよう、自分ができる支援を考えていこうと思った。信頼貯金、頑張ろうと思う。

・関係性の大切さを感じた。地域の中でどれくらい居場所を作れるか考えていきたい。

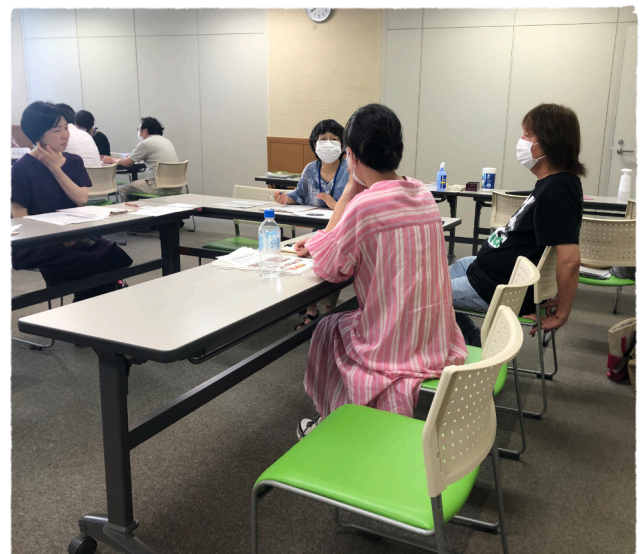


#### 【第二部 交流会】

・家庭、学校だけではなく第3の居場所がいくつかあるといいということがわかった。

・子どもの居場所に悩む保護者の方がとても多いと思う。その声に行政がしっかり向き合ってほしいと思う。

・教員、元教員の方々でも、学校という枠だけでは現在の時代に合っていないと感じているが、小中高のラインを外れるとたんに場所がなくなってしまうのが実情である。



## 遊ぶチカラは生きるチカラ

～子どもの多彩な力を伸ばせるのは遊びなんです～

# ③ 子どもの可能性は無限大

○キーワード：発達理解、感覚統合、合理的配慮、子どもの困ったには理由がある、遊びの中で育つ

○目的：遊ぶことで、子どもの発達の土台部分にあたる感覚統合が形成されること、さらに、その遊びが心置きなくできる場づくりについて考える。

■実施日時：2022年10月9日（日）13：30～16：30

■会場：クリエイイト浜松

■参加者数：20名（講座）17名（交流会）

■第一部講演会、第二部交流会＜グッズ体験＞

■第一・二部講師：

**茂木 厚子**（もぎ あつこ）さん

発達支援「Kids Sense」主宰

早期発達支援士・保育士・自閉症スペクトラム支援士・発達支援相談員・予防医学 代替医療復興協会 学術委員。著書「そうだったのか！子どもの行動」。米カリフォルニア州の早期療育学校で、発達が気になる子どもたちを対象とした早期介入セラピーを学び、特別支援教室の場で実践経験を積み帰国。現在は「親支援」が重要との考えから、発達支援への理解を促す講座の開催や発達に課題のある子どもを育てる親が集う場の提供を行う。



## ○こんなお話でした

### 【第一部 講演会】

- ・脳の土台作りが必要。「読み・書き・計算」。
- ・子どもはくっつくことで発達するアタッチメント（愛着形成）が重要であり、信頼できる大人であれば親である必要はない。アタッチメントがないと死んでしまう動物もいるように『感覚情報なしでは発達はない』（感覚統合理論提唱者エアーズ博士）。
- ・大人の考える「わがまま」「甘えている」「わざと困らせている」は思い込みであり、そういった行動をとることには意味がある。
- ・安心・安全・嬉しいなどの「快」の状態に身を置くことで脳が発達し、罰や叱責などで恐怖や不安「不快」の状態になると委縮してしまう。子どもに劣等感を与えることは心的なダメージを与え、発達を阻害するため、食べられないものを無理やり一口、などの強制的に成功体験をさせる方法はすべきではない。安心できるセーフティネットや居場所の確保、自由に遊べる等「快」の環境を整えること、安心できるものを取り上げないことが大切。



- ・乳児期原始反射のような自分の意思に反する反射的な動きも脳の育ちに影響を与える。
- ・脳は情報の刈り込みをする。考える脳を育てるには選択をさせることが必要。講義形式の受け身な教育では学びの力は育たず、能動的な教育を発展させるためにはインクルーシブでなければならない。
- ・発達の遅れがある子を支援級に在籍させるような分断や特別扱いをするのではなく、医療の前に出来る支援を進める。
- ・健全に脳が発達するために子ども達には「遊ぶ権利」「自己決定をする権利」「意思を表明し尊重される権利」「自由である権利」等があり、幼児期に権利を尊重されることで、自立・自律に繋がり考える脳が育つ。



## 【第二部交流会：グッズ体験】

実際にグッズを触りながら、自身の生活の中で生かされることを探しました。

### 口に刺激が必要な子

- ・ 原始反射の発達が足りないと嚥下や咀嚼に影響がある。自分のタイミングで自分で口に入れるためのツールが利用できる。
- ・ 言語発達は人の口の動きを見て発達するのでマスク社会は心配。

### 多動と思われる子

- ・ アメリカには肩にかけられたり、膝に置けたりするような様々な形の重りがある。
- ・ 自分の体に意識を向けて体が定まる。体の重心が落ち着く。

### 学習困難、視覚的な支援が必要な子

- ・ 矢印カードをつかって交通ルールや文字の書き方について、体の感覚を使って脳に伝える。
- ・ 見えていないところが想像出来ない場合や数の概念が分からない子がいたりする。目からだけでなく触覚から「2」や「3」を学ぶ。(例：ドットの3、文字の3、言葉の3などの多様な形で3を理解していく)
- ・ 眼球運動が弱い子はボール遊びや物の移動を使って強化していく。

## 触覚・固有覚に刺激が必要、不器用な子

・ 触られるのが嫌だけど自分から手づかみ食べをする等、鈍感と敏感が両方ある。

能動的に動くときに快があるのではないかな。

・ ずっと触っているということは必要な感覚、足りていない感覚、という意味。

・ 不器用な子は、身体をコントロールすることが苦手なので止まる遊びをするとよい。



## ○参加者の感想

### 【第一部 講演会】

- ・ 「子どもが嫌がることは意味があるので無理やりさせない」という言葉が印象的。遊びが大切だということを再認識することができた。
- ・ 自分の子ども（双子）が発達障害と判断されて7年、今回の講話で自分自身の子ども達に対する子育てを改めてみようかと思った。
- ・ 危ない経験が危険を回避する力を育てる。
- ・ 子どもたちにまずいろいろな経験をさせてから学ぶというところが教えているリトミックと同じだな、と。目先のことにとらわれてしまうことが多いので、まず自分の意識を変えなければ、と思った。子どもは遊びから、もっとのびのびと育てたいと思った。



### 【第二部 交流会】

- ・ お互いの気になるものを共有できた。使い方も知ることができた。
- ・ 子どもの育つ環境は気がついた大人が変えていく。
- ・ 実際に支援グッズに触れながらディスカッションできたので良かった。
- ・ 新しい発見の玩具やカードは、とても勉強になった。特に口に関する物やバランスボールの奥深さなど、特別ではない道具やおもちゃが、発達を促すことを知った。





## ご近所あそびコーディネーター養成講座

遊び場の運営力をつけ、コミュニティと繋がりながら、遊び場活動ができる技術や知識を身に着けること、また講座生同士つながりが持てるように仲間作りの場としても機能することを目的に、1) 地域の子どもの居場所事情 2) 公園のユニバーサルデザイン 3) リスクとハザード及び遊び場づくりの準備 4) おためしプレーパーク 5) 遊び場づくりの振り返り及び公園とコミュニティづくり、という内容で5日間の講座を実施しました。

令和4年度独立行政法人福祉医療機構 社会福祉施設育成事業

N-Pocket

子どもの育ちを地域で応援!!

**ご近所あそび** 参加無料

コーディネーター養成講座 (各回20名)

---

**1 集まれ!【地域×子ども】のために何かやりたい人**

7/3日 会場 市民協働センター 第1・2研修室 13:30-16:30 講師 萩原建次郎さん  
駒澤大学総合教育研究部助教授 駒澤の実践者のみなさん

親でも学校の先生でもない人と出会う、地域の居場所がなぜ必要か? という根本的なことを学び、考えましょう。また、浜松での実践者から、どこでどんな場を作っているのか、作ったからこそ見えた問題など、さくばらんに伺います。何かやりたい人、すでにやっている人が出会う、つながる場にもなりますように。

---

**2 誰もが遊べる“インクルーシブ公園”ってどんな場所?**

9/11日 会場 福祉交流センター 大会議室 13:30-16:30 講師 龍村あゆみさん  
(東京都議会議員)

2018年都議会でインクルーシブ公園を提案した東京都議の龍村さんは、ダウン症のあるお子さんのシングルマザーでもあります。海外での公園事情を伺いながら、インクルーシブな社会に向けて、当事者が声を上げ、反映されるにはどんな必要があるのか考えましょう。

---

**3 みんなで作るよ! 1日だけのあそびば (準備編)**

11/6日 会場 東区方解庄遊公園 (予定) 13:30-16:30 講師 塚本由さん  
(いぬのあそびパークグループ 日本福祉遊び場づくり協会 地域運営委員)

子どもが自由に遊ぶプレーパーク、子どもの遊びやプレーパークのエッセイの塚本さんに、子どもの遊びの大切さや遊びにかかわる大人の役割について学びます。4日目の「みんなで遊ぼう! 1日だけのあそびば」(実践編)の計画も立てます。

---

**4 みんなで遊ぼう! 1日だけのあそびば (実践編)**

12/4日 会場 東区方解庄遊公園 (予定) 10:00-15:00 講師 塚本由さん  
(いぬのあそびパークグループ 日本福祉遊び場づくり協会 地域運営委員)

プログラムのない、子どもがやってみようを大切に遊ぶ遊び場をみんなで作り、大人も子どもも遊んでみましょう。どんな気づきがあるでしょうか。  
※3日目の講座を受講した方のみ参加可能です。こちらの講座のみ単体で参加することはできません。

---

**5 こんな場所なら関わりたい! コミュニティを育む公園**

1/15日 会場 未定 13:30-16:30 講師 木村智子さん  
(スマイルプラス代表)

実践を振り返りながら、コミュニティと公園について考えます。人・まち・自然を結び、「関わる人が自ら楽しみながらコミュニティを育む場」をつくる実践のヒントやノウハウを伺います。



### 1 集まれ!【地域×子ども】のために何かやりたい人

●キーワード：子どもの居場所、公園協議会、子どもの声を聴く、プレーパーク、子どもの放課後

●目的：親でも学校の先生でもない人と出会う、地域の居場所がなぜ必要かについて学ぶ。また、浜松での実践者からどこでどんな場を作っているか、作ったからこそ見えた問題を聞くことで学びを深める。さらに、居場所づくりに興味のある参加者同士の出会いの場とし、つなげる。

- 実施日時：7月3日(日) 13:30~16:30
- 会場：浜松市市民協働センター 第1・2研修室
- 参加者数：36名(会場参加30名 オンライン6名)
- 第一部講演会 会場+オンライン

講師：萩原 建次郎 (はぎわら けんじろう)さん  
 駒澤大学総合教育研究部部長。専門は、教育人間学、社会人間学。研究テーマは、子ども若者の居場所と参画、社会構造の変化と子ども若者の人間形成。  
 主な著書：『居場所 -生の回復と充溢のトポス-』



#### ●第二部交流会

<子どもの為の場づくり実践者からの活動報告と参加者交流>  
 報告者：伸松園・小畑直也さん、自主まめつちよ・東井貴子さん、浜松里山竹クラブ・佐野清美さん

#### ●こんなお話でした

##### 【第一部講演会】

・居場所作りは、大人がよしとする秩序維持形成型のもの、子どもの存在欲求に寄り添ったものという二つの方向性に特徴づけられる。





・昔はアナーキースペース（資材置き場等）やアジトスペースが存在していたが、現代社会では社会の目、大人目、規範的な目、監視の目が行き届かない場所がなくなっている。

・子どもにとっての公園は、生の充足感を得る場、公共・共助を学ぶ場という意味をもつ。

・多くの親も外で遊ばせたいと思っている。子どもも遊びたいと思っている。しかし、公園は苦情がでて禁止だらけとなり、遊べなくなっている。

・多世代を巻き込んだみんなの公園となるよう、子どもや子どもの代弁者を加えた公園運営協議会を置くことが必要。

・プレーパークには、大人社会がもつ秩序の維持形成と子どもの存在欲求への寄り添いという二つの要素が入り込んだ居場所である。

・子どもの存在欲求に寄り添った居場所を増やす必要がある。

### 【第二部交流会：場づくり実践者からの活動報告】

・伸松園は植木屋さんですが、その農場を開放し、ロープ、ハンモック、木の廃材等を使って子どもたちの自由な発想による遊びを可能にしていました。

## ●参加者の感想

### 【第一部講演会】

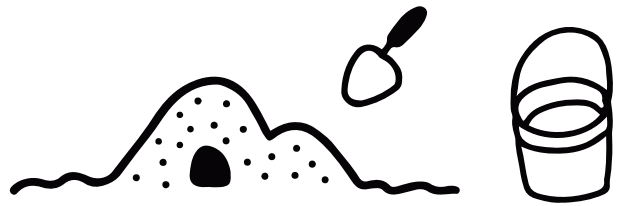
・子ども達が公園のルールについてみんなで話し合いたいと考えているのが印象的だった。やはり子ども達はちゃんとわかっている。私も公園に関わるいろんな方と話し合っ、みんなが使いやすく安心できるルールを決めることができればいいと思う。

・空間から見た子ども政策の図がわかりやすかった。生の充溢を生み出す中間領域の再生への考え方を知ることができてよかった。市民のほとんどが中高生にとっての公園がもつ役割を知らないのを啓発し、理解を広げていくことが必要だと思った。

・こうでなければならないという世間からの偏見が一番あるのも中学生なんだろうと思った。何歳だから何々出来るだろう、何々出来ないといけないという重圧をナナメの関係や学校以外の繋がりが増えたら取り払ってあげられるのではないか感じた。以前、中学校に行った時、まるでそこは軍隊のようだった。そこまで管理しないと荒れてしまうのかなと少し悲しくなった。何がしてあげられるのか悩ましい。

・大人目に届かない場所、空間の必要性。非行など心配になる部分もあるので、どう作っていくか考えてみたい。

・子どもの居場所づくりは、まずはその場所に居ても安心していいよ！と思えるような雰囲気づくりが大切。



・自主まめっちょは、0歳から小学生の子どもをもった保護者たちがつくったグループですが、古民家や畑を使って自然遊びの中でやってみたいという子どもの気持ちを大切にしたいという実践中です。

・浜松里山竹クラブは、竹林整備をしてきた活動を引き受け、子どもたちのために気持ちの良い場所づくりを心掛けながら、竹の子掘りといった体験や自然遊びを行っています。

・それぞれの子どもの居場所を作っている人たちは、参加者を集めるのに苦労していましたが、結局口コミの力が強いこと、また、近隣よりも遠くからの参加者の方が多いという状況が共通していました。

・子どもにとって実体験などから感じとった肌感覚であった部分が、明確に言語化されていた。

・公園は、地域課題解決のプラットフォームになり得ることから多くの方にかかわってほしいと思う。



### 【第二部交流会】

・子どもにとって年の離れた年代は近寄り難い。世代間で分断が生じているという言葉が印象に残った。

・地域交流という「遊び」を子どもたちにも大人たちにも提供できるといい。遊びのある居場所って大切。世代をつなぐものも遊びなのかな。

・園庭がなく近隣の公園で遊んでいるが、入りにくい公園はある。綺麗すぎる公園、内輪で集まっている公園、管理の行き届いていない公園など色々あると思う。

・大人も子ども集まりやすい公園に必要な物は物ではなく、親しみやすい雰囲気なのかなと思った。

・子どもたちとシニアの考えのギャップの大きい事を知った。それぞれのクラブでの人集めに苦労している事を知った。



## ② 誰もが遊べる"インクルーシブ公園"ってどんな場所？

○キーワード：インクルーシブ公園、共生、孤立、コミュニティづくりのプロセス、インクルーシブ教育

○目的：海外での公園事情について聞きながらインクルーシブな社会に向けて当事者が声を上げ、反映されるにはどんなことが必要なのかを考える。

■実施日時：2022年9月11日（日）13：30～16：30

■会場：福祉交流センター大会議室

■参加者数：20名（会場参加16名 オンライン4名）

■第一部講演会 会場+オンライン

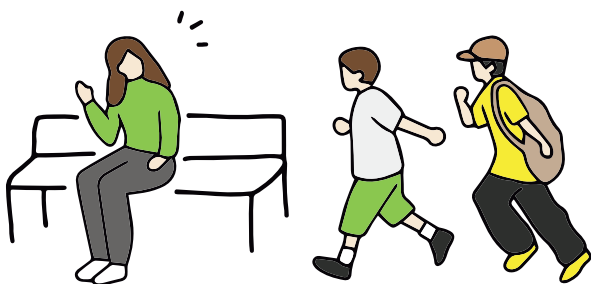
講師：龍円 あいり（りゅうえん あいり）さん  
東京都議会議員。スウェーデン出身。法政大学法学部政治学科卒業。テレビ朝日アナウンス部、社会部記者として活躍。退職後米国カルフォルニア州へ移住。2017年東京都議会議員選挙で初当選。ダウン症がある長男のシングルマザー。



■第二部交流会

<障がい者の行動を理解するための寸劇と参加者交流>

登壇者：浜松キャラバン隊（浜松市浜松手をつなぐ育成会）



○こんなお話でした .....

### 【第一部講演会】

・米国で障がい児の子育てをしたが、障がい児でも遊べる公園があたりまえにあり過ぎて、日本帰国後そのギャップに驚いた。

・日本では公園で遊べない子がいる。その結果、公園で見かけることがないため行政は問題に気づかない。

・インクルーシブ公園は、乳幼児期に孤立しがちな親子が地域社会に繋がり、福祉につながるという意義をもつ。

・子どもにとって成長の場。多様な子どもの存在を自然と知り、相互理解が進む。インクルーシブ社会をつくる人を育てる。共助の力も育つ。

・東京でのインクルーシブ公園は、1年かけて調査と設計をしたが、福祉と連携して多様な親子の話が重要だった。2020年3月にオープンした後、定期的なモニタリング調査を行っている。

・インクルーシブ公園をハードで造れば終わりではなく、その場を通して育つもの、育てるものがあり、設置した後のコミュニティづくりのプロセスがとても大切だ。

・公園は理解し合う仕組み作りを可能にする。子どものインクルーシブ教育の場にもなり得る。

### 【第二部交流会：障がい者の行動を理解するための寸劇】

浜松キャラバン隊が、知的・発達障害のある人たちのことを少しでも知っているとは対応は難しくないということを伝えるために「こんなとき、どうする？ーコンビニ編ー」と題し、劇でわかりやすく伝えました。

また、障がいのある子どもとは夜になってから公園を利用するという話もあり、あらためてその課題に気が付いた参加者が多かったようです。多様であるという言葉に想像もつかない世界があることを想像する必要があることが理解されたと思います。

グループ討論では、遊具がない公園の方が創造力が育つという意見や、反対に、遊具がないと遊べないという多様な子どもたちの姿を共有しました。

また、公園は公共の場であり、公園をテーマに市民が互いに理解し合うための仕組み作りができること、また、子どものインクルーシブ教育の場にもなり得ることについて話を深めることができました。

### ●参加者の感想

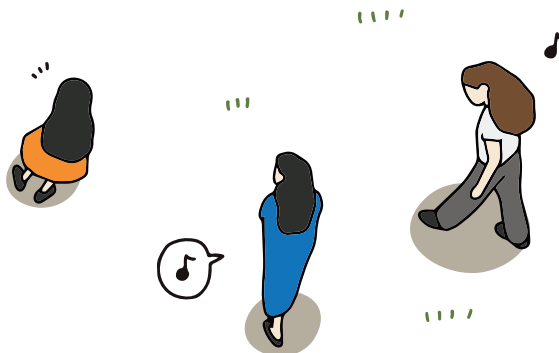
#### 【第一部講演会】

- ・子どもが「居たい、来たい」と思う「仕掛け」は何だろう？インクルーシブ遊具なのか、プレーパーク的空間なのか？
- ・自分たちの公園として主体的に関わる人材養成が大事と考える。
- ・インクルーシブ公園は遊具だけでなく、様々な人が交流できる工夫や配慮が必要だ。
- ・様々な状況の方、考え方の方がある中で、遊び場づくりをすることになる。誰もが関われる、関わりやすい運営が大切なのだと思う。とても高いスキル、ノウハウが求められると思う。
- ・様々な立場の人との対話から、はじめから完成型を目指すのではなく、マイナーチェンジを繰り返しながら、みんなの居場所となるとよい。
- ・保育園の園庭にインクルーシブ遊具を設置し、地域に開放して公園のように利用するようなことができないかな？と思った。遊具があると、遊びが固定されてしまうデメリットもあり、子どもたちが集まる材料にもなり、考えるところだ。
- ・障がいのある子、ない子の親との間にある壁ができていくように、また、両者の関係が作りやすいようにするためにはどうしたらいいのかと考える。
- ・子どもが何を必要としているのか？コミュニケーションの取り方を大人が見せてあげる、相手を思いやる心、大人が介入をし過ぎない。
- ・雨でも使えるよう、建物がほしい。



#### 【第二部交流会・公園の環境づくりについて】

- ・遊具は要らない。山があればいい、木があればいい、自然があればいい。
- ・遊具がないと遊べない子どもがいる。遊具があるからこそ、遊ぶ見通しを立てることができる。逆に遊具がないと何をしたいかわからない。
- ・ADHDの子どもが出て行ってしまわないよう囲いがあると助かる。
- ・一人ひとりのニーズに沿って、ゾーニングで分ける良さ（安全）もあるが、一緒に混ざることができず、分離をうむ。
- ・自閉でこだわりが強いため、面倒なことが起こらないよう公園で遊ぶ時間を誰もいない夜にしている。
- ・自治会とつながるために自主防災隊に入ったが、防災訓練時に障がい当事者家庭として障がいのある子を連れていったら初めてだと言われ、驚かれた。





- ・障がいのある子どもたちとどう触れ合ったらいいいのかよくわからない。
- ・障がいについて理解している人が公園づくりのワークショップに参加しても、実際に公園ができれば、障がいに理解のない人がどのような反応を示すのか不安になる。
- ・公園は地域課題の解決のプラットフォームになるので大切である。
- ・象徴的なインクルーシブ遊具を置くだけではインクルーシブ公園とはならないことがよくわかった。



### ③ みんなで作るよ！ 1日だけの遊びば(準備編)

○キーワード：サンマ（時間・空間・仲間）、リスクとハザード、子どもの権利、プレーパーク

○目的：子どもが自由に遊ぶことができる環境づくりの秘訣を学ぶ。お客さまにならない、みんなで持ち寄って遊ぶための話し合いを行う。

- 実施日時：2022年11月6日（日）13：30～16：30
- 会場：ふれあい交流センター竜西 大広間
- 参加者数：22名

#### ▪ 第一部講演会

講師：塚本 岳（つかもと たけし）さん

#### 第一部講演会

講師：塚本岳（つかもと がく）さん  
名古屋市緑児童館館長、にいの三池プレーパーク  
リーダー。

「子どもには遊びを通じて自ら育つ力がある」をモットーに、提供型ではない自主的な遊び場作り、遊び環境を整えることをライフワークとしている。



#### ▪ 第二部交流会<遊び場づくりの計画、話し合い>

講師：塚本岳さん、木俣雅代さん（子どもの遊び場応援団「あそばんび」代表）、米村直樹さん（静岡県シェアリングネイチャー協会代表）、池谷啓さん（NPO法人楽舎理事長）、山本尚美さん（ガールスカウトリーダー）

#### ○こんなお話でした

##### 【第一部講演会】

・プレーパークをつくるポイントは、「子どもは遊びを通じて自ら育つ力を持っている。それを信じて遊び場を作ればいい。」



・最近の子どもは遊ぶ力がないわけではなく、サンマ＝三つの間（時間空間仲間）がない。奪っているのは社会。どの子ども社会的に発揮できない状況で、都会の子どもも田舎の子どもも遊ぶ場がない。

・子どもの権利と密接に関係している。1989年国連で子どもの権利条約が採択、1994年に日本で批准。しかしその内容は日本で浸透していない。プレーパークは、育つ権利、参加する権利と密接に関係している。

・時間空間仲間があれば自ら育つが、大人が子どものためを思っているとそれらを削ることがある。親が悪いわけではなく、我が子をきちんと育てなければという重圧を社会全体からうけるからだ。

・プレーパークにおけるリスクは、予測判断のできる危険。子どもの成長にとって有効な、挑戦してみたい、と思えるような危険。ハザードは子どもには予測できない、見えない危険。できる限り事前に排除しておくべき危険。ハザードの方はどうにかして排除、もしくは改良してリスクに変えるようにする。

##### 【第二部交流会：遊び場づくりの計画】

グループに分かれ、どんな遊びが展開されそうかを話し合い、持ち物を確認しました。



## ◎参加者の感想

- ・記憶に残ったひとことワードは、①遊ぶことで自ら育つ力がある ②遊びのキット化はない ③遊ぶことは子どもの権利 ④暇 ⑤安全に危険なことができる状況 ⑥子ども時代にあー楽しかった！という経験を ⑦アホみたいに遊ぶ ⑧ナナメの関係 ⑨外遊びはAKU（あぶない・汚い・うるさい）である ⑩遊育 ⑪内側に根拠のある自信 ⑫リスクとハザード
- ・子どもの安全を守りながら、子どもにとっての関心を引き出し、わくわくする体験になるようにしたい。
- ・子どもたちが自由に遊んでいる場を大人は全体の交通整理をする。余分な口出し、手出しはしない、見守ることが大事。
- ・そのとき、その人が何を必要としていて、何が必要でないのか考えること。
- ・リスクとハザードについてよく考え、大人は環境を整えるだけ。
- ・大人が誘導するというより、ヒントやきっかけになる声掛けや行動ができればいいと思う。
- ・プログラムを設定するのではなく、原始的な道具や素材を持ち寄る。

- ・危険個所の事前確認が大事。
- ・子ども主体で考えることができるようにする。命に関わる危険だけ取り除くようにする。
- ・大人がよかれと思うことは必要ない。子どもたちの遊びを見守り待つ心持ちが大切。子どもと遊ぶときに常に心にとめておきたい。
- ・大人の「せっかくだから」はいらない。一番気を付ける。そして大人もみんなで楽しもう！
- ・作りこまないことは大切だが、はじめての導入は大人が導き、後追いし、企てが必要になると思った。
- ・まずは子どもに「遊びの楽しさ」に目覚めてもらうこと。
- ・焚火ができると魅力的、しかし消防との問題が残る。
- ・子どもが自ら遊びたくなる環境づくりでなく、思いをもって集まっている人たちでも、子どもを遊ばせるために何を大人がするか？という話になっていて遊び場づくりの難しさを感じた。

## 4

## みんなで作るよ！1日だけの遊びば (実践編・おためしプレーパーク)

◎キーワード：子どもの居場所、公園、冒険遊び場、万斛庄屋公園、遊びの創造

◎目的：準備編にて計画をたてたプレーパークの実践を行う。プログラムのない、子どものやってみようを大切に遊ぶ遊び場をみんなで作り、大人も子どもも遊ぶ。

- 実施日時：2022年12月4日（日）10：00～15：00
- 会場：東区 万斛庄屋公園（まんごくしょうやこうえん）
- 会場受付参加者数122名（うち講座参加者数26名）
- おためしプレーパーク

講師：

- 塚本 岳さん（にいの三池プレーパークプレーリーダー）
- 木俣 雅代さん（子どもの遊び場応援団「あそびんび」代表）
- 米村 直樹さん（静岡県シェアリングネイチャー協会代表）
- 池谷 啓さん（NPO法人楽舎理事長）
- 山本 尚美さん（ガールスカウトリーダー）

協力：

- 松川電気株式会社、NPO法人旧鈴木家跡地活用保存会、万斛広場利用者委員会、NPO法人積志かがやきカフェ、どんぐり保育園、万斛幼稚園、中郡小学校、中郡中学校

開催支援：

- 浜松市公園課

おためしプレーパークで遊ぼう!!

2022 12/4 (日) 10:30 ▶ 14:30

場所・万斛庄屋公園 (静岡県浜松市中区中郡380)

対象・どなたでも

参加費・無料

主催 NPO 法人 浜松 NPO ネットワークセンター (エヌポケット / N-Pocket)

〒430-0823 浜松市中区役所南3-52-23 TEL/FAX: 053-445-3717 メール: info@n-pocket.jp





**【万斛庄屋公園について】**

会場とした万斛庄屋公園は、江戸時代に庄屋としてこの地域を治めていた鈴木家の屋敷跡でしたが、PFIの手法によって明治時代に建てられ老朽化した建築物は再生されました。屋敷内にある広い庭や周辺の田んぼは、グランドゴルフ会場や地域内の子どもたちの学習の場として地域の人々に活用されています。当法人は2016年度からコーディネーターとして公園の活用支援に関わってきました。



(今までの取り組みはこちら→)



**【おためしプレーパークのコンセプト】**

- ①一緒に遊びの場を作り、楽しむ場
- ②子どもの創造性を尊重する場
- ③大人が「見守る」を学ぶ場（過度な危険がある場合は注意）

参加者は「ケガと弁当はじぶんもち」のお試しプレーパークで、スラックライン、木にロープをかけブランコ・ハンモック、田んぼで泥団子投げ、竹工作、段ボールを使った遊び、モルック、七輪を使ったマシュマロ焼き、お絵描き、相撲、落ち葉遊び他、名前のつかない遊びなどをして楽しみました。

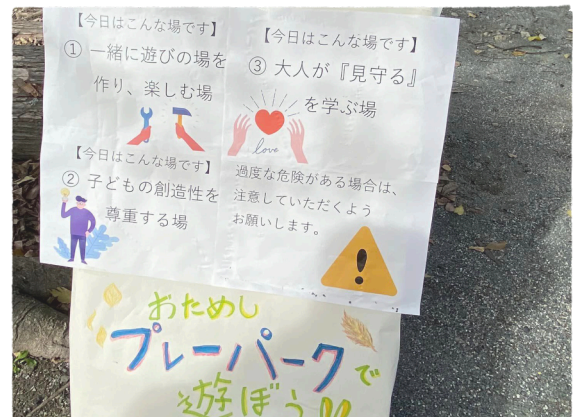
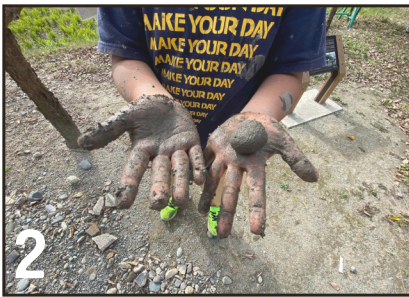


写真1 | スラックラインは皆で楽しめるように二重に張りました





2



3



4

写真2・3・4 | 田んぼで泥団子をつくったり、落ち葉の中に埋もれたり、寝転んだりして楽しみました。



5

写真5 | 紙芝居セットをみた子どもが「これなあに？」と質問。「僕が読むから」と始まった子どもによる大人のための読み聞かせ。



6

写真6 | 七輪の周りに座って、砂糖水で餡を作ったり、マシュマロを焼きました。初めての子が次に来る子に方法を伝授していきます。



7

写真7 | 落ち葉をつめた着ぐるみで相撲をとりました。



8

写真8 | ささっと木片に絵を描いた中学生。



9

写真9 | 本部になった屋外こたつ



10

写真10 | 木の枝にロープかけブランコ完成



11

写真11 | 最後には振り返りの会



### ●参加者の感想

- ・子どもと同じ目線、同じ立場に立って遊ぶと大人も子どもも関係なく楽しめるし、一体感が生まれると感じた。子どもたちは大人を自然と信頼できる相手と認識するような気がした。
- ・特別な遊具が無くとも、自分で遊びや遊ぶ方法を生み出していく。大人は本当に危ない事がない限り、口出し手出しはしない方が良いと思う。
- ・自然の中にあるもので子ども達の自由な発想で楽しい遊びに変えられる。



- ・自然の中で創造的な遊びができてくるのが面白いと思っていたが、スタート時点ではいろいろな遊び道具が役に立つんだと知ることができた。
- ・講師の子どもたちとの関わり方として、子どもの遊びの中を渡り歩いていた。向き合うときはしっかりと子どもの方を向いている。遊びのきっかけづくりの方法や困っているときにサッと現れる空気を読む力が参考になった。
- ・時々声をかけてくれる受講者でもあるおじいちゃんたちの言葉も優しさに溢れていた。いいよいいよここにいいよと受け入れ、見守ってくれる存在のありがたさを感じた。
- ・大人が楽しめる、負担は少なく、というあたりを意識している。
- ・「見る」ということも遊びである事
- ・子どもの話しによく耳を傾けて、興味を潰さない様に見守る事はできると感じた。
- ・簡単な遊び道具を少し用意し、初めての子も遊びやすくすることが大切と思った。

- ・外でのボードゲーム、鳴り物、楽器の導入も楽しい。
- ・幼稚園ではあまり遊び道具などなく、土や葉っぱや木の枝などで毎日楽しく遊ばせてもらっていたため、参加した子どもが、幼稚園の時みたいといって楽しんでた。
- ・やはり遊具など常設できる魅力的なものは公園に必要だと思った。
- ・一過性なイベントだと公園を遊び場として継続的に利用しない恐れがある。
- ・子どもは自由に遊びを創造することには同意するが、今の時代、魅力的なものが多く存在する。それを上回る魅力的な公園にしていかなければならない。まずは来てもらって、魅力的なもので遊ぶその延長線上で子どもたちは木や土などで自由に遊ぶようになっていった。自由に遊ぶには、結局は大人が与え、仕掛けていくことが必要なのかと感じた。
- ・普通の公園ではそれができないが、お試しプレーパークはよその家族と混じて遊ぶ空気があった。家族だけで遊ぶのと随分違いがあると感じた。

## 5 こんな場所なら関わりたい！ コミュニティを育む公園

●キーワード：地域づくり、コミュニティと公園、公園の利用申請、コーディネーター

●目的：実践編を振り返りながらコミュニティと公園について考える。人・まち・自然を紡いで「関わる人が自ら楽しみながらコミュニティを育む場」をつくる実践のヒントやノウハウを理解する。

●実施日時：2023年1月15日（日）13：30～16：30

●会場：和地山公園 集会所

●参加者数：18名

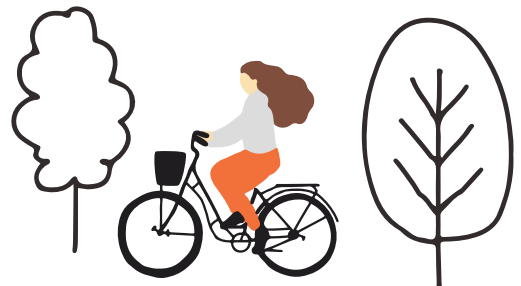
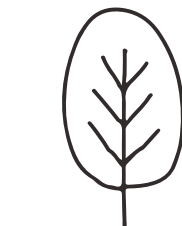
●第一部講演会・第二部交流会

<コミュニティづくりのためのグループワーク>

●第一部・二部講師：

**木村 智子**（きむら ともこ）さん

（有）スマイルプラス代表取締役、浜松NPOネットワークセンター理事。まちや、公園、各種施設など、コミュニティづくりのためのみちすじを物語として描き、ばらばらになった人・まち・自然を紡いで「関わる人が自ら楽しみながらコミュニティを育む場」の実現をサポートする。  
千葉大学園芸学部造園学科卒業。



●こんな話でした

【第一部講演の前に振り返りの会】

- ・定例で開くプレーパークには、今回のおためしプレーパークで使ったようなはしごやロープは用意しない。
- ・万斛庄屋公園の木々の下には庭石が置かれているところや木の根が張り出しているところが多くあったので、リスクとハザードの視点から注意しないといけないポイントがいくつかあった。
- ・遊ぶ場にお絵描きの道具が置いてあったがどうしていいかわからない子どももいた。遊び慣れた子どもは早速田んぼで、刈り取った稲を抜いて投げつけていた。それが本当の子どもの姿。田んぼに落ち葉をかき集めてあったことで、子どもの遊びの創造性を刺激した。
- ・人の多い公園に家族で遊びに行ったときは、家族だけで遊んでいたのに、おためしプレーパークに来たら、他の子どもたちと交じって遊ぶことが自然にできていた。
- ・火が怖いものになっている。火の扱いに慣れた大人であってほしい。

- ・中学生でボヤを出してしまうのは小さいときに火を経験していないからだという話が前回の講座であった。
- ・紙芝居の道具を初めてみた子どもが好奇心を持ち、自分でやりたいといったが、文字を読める年齢ではなかった。しかし、絵を見ながらお話を作って紙芝居を大人に見せていたので感動した。
- ・公園に小山になっている場所があるだけでもいい。



### 【第一部講演会】

- ・遊びの場として公園を使うときには、上手に使わせてもらうためのノウハウがあるので知っておくとよい。
- ・行政は公平性を行動原理とするということを理解しておくこと、その相手がイエスと言いやすいやり方を探していくことが大切。
- ・公園利用をするときに重要なステークホルダーは公園のご近所さんである。クレームが生まれやすい相手でもあり、行政にとっても気になる存在であるので公園のご近所さんとの対話を大切にしなければならない。
- ・浜松市には「緑の基本計画」というものがあり、環境共生社会の実現や、健康・福祉・生活の質の向上、子どもの遊びや子育て

に深く関係するコミュニティの醸成など、緑が様々な役割もっていることを述べているが、そのことを理解していると公園関係行政と話が進みやすいかもしれない。

- ・一口に公園と言ってもさまざまである。都市公園を使いたいときは、浜松市公園管理事務所に相談しに行くことになるが、児童遊園地は自治会が管理主体になっている。自分たちが使いたい公園はどのような種類のものか知っておくことが必要。
- ・浜松市の公園基礎知識について「はままつ公園活用ガイドブック」が利用できる。
- ・公園利用の申請の際には、近隣に迷惑が掛からないかが一番大きな問題と捉えられ、安全性の担保や確実な責任者の存在がポイントになってくるので、リスクとハザードの知識も必要。
- ・市民が資金ゼロで始めた取り組み「おんた稲荷プロジェクト」の紹介。
- ・プロジェクトを進めるために必要な役割を考えると、リーダーは判断や指示で人を動かすが、関わる一人一人が自分事として動くようになるために、コーディネーターという動き方がよい。
- ・ご近所あそびコーディネーターとして、多様性を受け入れ、関わる「みんな」で考えるということ、とにかく対話を大事にするということが、大切なことである。

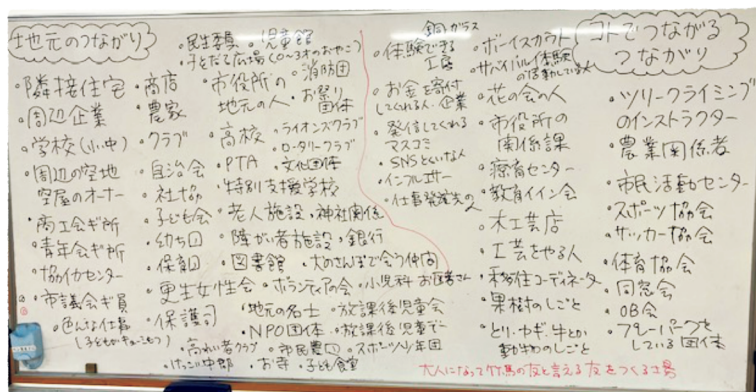
### 【第二部交流会：コミュニティづくりのためのグループワーク】

地元の多様なつながり、コトでつながるつながりを洗い出し、どうやってつながるかを考えました。

## ●参加者の感想

### 【第一部講演会・第二部交流会】

- ・このメンバーで皆が自分ごととして、実行していく一歩として、実行委員会を作り、市内の広い公園で「浜松プレーパークフェス」をやってみるのはどうか？と思った。テーマは「子どもの遊びを創造する、見守る」はいかがか。会場につながりたい人や企業を招待し、この輪を少しずつ大きくしていこう。
- ・人と人とのつながりを大切にと思い、活動しているが、その大切に思っていることが良い、そして対話すること、自信にもなった。様々な方たちと交流することができ、まだまだ私にもできることがある！子どもたち、子育てするママたちのために進んでいきたいと思う。
- ・公園がイベントとしてではなく、通常利用の中でプレーパーク化、遊びをする公園になるためには、公園に何が必要だろうか？
- ・グループ討論で、自分一人では考えられなかった事柄や意見をたくさん聞いて勉強になった。検討すべきことは多いが、子どもたちにとって安心・安全な環境を確保していくことが大切なことを実感した。
- ・コーディネーターの役割を学ぶことができてよかった。ファシリテートに近い役割であると感じた。情報を出すと返ってくる。やはり発信は大事！地元でつながる、コトでつながる、いろんな人と繋がり、スポーツを遊びととらえ、心と体が健やかになる、みんなの居場所を作る！



- ・今回「公園遊び」がテーマだが、公園に限らず、気軽に集まって、楽しむ場作りの参考になるところはたくさんあった。今までの目標や考え方を改める機会になりました。
- ・「笑顔で対話」をいろんな人としていくことが大切とわかった。地元のつながり、コトでつながりのワークショップでは、自分でも気づかないつながりを教えてもらった。グループワークではいろんな地域の方のお話が参考になった。地域の人たちの思いはさまざま。対話がやはり大切。
- ・地元やコトでつながる関係づくりが大切。コーディネーターの役割は重要だ。公園での様々の体験を通して、子どもたちが大きな夢や志を育むことができるように努力したい。





## 子どもの居場所を考える ネットワーク委員会

公園をいかに子どもたちに開放できるか、子どもの遊びや居場所作りに関わる専門家や地域活動家及び公園関係者をネットワークし委員会を構成しました。子どもの遊び場活動に向けて課題を探りながら、人材養成(ご近所あそびコーディネーター養成講座)に関する運営のための情報・意見交換をすると同時に行政との協働を進めるための場として、5回の委員会を開きました。



### 委員

- ・ 県公園管理関係者：橋戸 祐樹さん
- ・ 幼児教育関係者：東井 貴子さん
- ・ 障がい者相談支援専門員：紙丸 歩さん
- ・ 子ども体験農園管理・運動指導員：武藤 文美さん
- ・ 自然環境保全関係者：荻哲 也さん

### オブザーバー

- ・ 公園行政：藁科 千夏さん
- ・ 公園行政：梅林 佳歩さん

### 【第一回委員会・県立公園指定管理者から伺う】

石人の星公園にまつわる話を管理者である橋戸委員から伺いました。

- ・ 仕事は様々：草刈り、掃除、自動ドアの点検、夜間の警備、サッカー球技場の芝生管理、電気水道備品の修繕、救命講習、競技団体との調整、イベント団体との調整など多岐にわたる。
- ・ 公園の利用あれこれ：ゲートボールの協議会や、精神科クリニックなど多様な団体と連携。豊かな自然があり、4種の子どもの自然学校を実施。指定管理団体や連携団体主催のイベントがあり多様。犬の散歩禁止の公園が多いが、犬のしつけ教室を開きマナーを学んでもらって利用可能にしている。近隣の中学校や特別支援学校からの依頼もあり、地域とのつながり活動として作業学習、職場体験なども実施。浜松市がラグビー誘致し、オリンピック時に利用された。



・ 管理の課題：販売行為、建物設置は指定管理者に任されているため、弱みにも強みにもなる。多様な利用法が可能になるよう、虫を生かすための雑草がきれいな芝生かの葛藤があるが、ゾーニングで解決可能な面もある。管理者の考え方の表れとしてクローバーやキノコがある場所を設けたりすることがある。

### 【第二回委員会・公園と子どもの居場所づくりについて】

- ・ 暑さ対策は木陰やミスト、スプリンクラー。スプリンクラーに触ることが子どもの遊びになっている。
- ・ 日陰や公園内に建物があると、利用しやすい公園になる。
- ・ 公園では案内板のユニバーサルデザイン化やQRコードの活用が必要である。
- ・ 楽しみが季節によって違ったり、自由に遊びを作っている公園があるといい。
- ・ 公園で子どもに何して遊ばせていいのかわからない場合があるため、公園遊具は必要である。
- ・ 公園の整備や管理により危険といわれる場所・事柄が排除されすぎ、人や子どもの能力を阻害している。
- ・ 一人からのクレームで禁止事項が簡単に生まれ、公園は禁止だらけになっている。
- ・ 親が安心できる公園であること。公園の管理事務所があるだけでそこに人がいるという安心感が生まれる。
- ・ 公園は子どもたちが放課後に自由にいてよい場所であるが、その場が学校だと安全第一が優先事項になる。
- ・ 親が安心して行かせられる場所があったらいいが、交通事故や不審者、熱中症などの問題があり、安全を確保するために親がついていくことになる。それが監視に繋がってしまう。
- ・ 子どもの居場所は、心のままに過ごせることが大切だと思うが、遊び場といってもプログラム化されているものがあり、心のままにとは言い難い。
- ・ 自分を評価することのない居場所が子ども達に必要。居場所では緩い関係、斜めの関係でいられる大人、多様な大人達と出会うことができるとよい。



### 【第三回委員会・公園と火・ケガ・遊具・クレームについて】

- ・現在市内の公園では基本、火気厳禁の状況があるがルールがある。花火は使用可能だが時期を決めている。
- ・一部の公園で要件が揃えば火の使用許可が出たりする。その要件を市民と共有するのが困難な現状がある。
- ・ハザードの発見・除去は必須だが、そのためのコミュニケーションを怠ると誤解が生じて問題が起こる。
- ・火の使用許可が出せる環境整備のために、公園行政関係者と市民間でコミュニケーションが必要である。
- ・プレーパークでケガのために任意で保険に入るが、最初からそれを言わない。保険つきの場である、となると、運営側の人間がサービス提供者、利用する側が消費者という立場が変わってしまう恐れがある。
- ・子どもの発達に大いに影響する感覚統合の視点から遊具の価値（ジャングルジムは固有覚、ブランコは前庭覚を育てるなど）を意識する必要がある。
- ・公園管理業務として、遊具は週一の点検、年一回は専門家の点検が義務付けられている。
- ・遊具の耐久年数は素材によって違うが、木製は20年で丸ごと更新、プラ素材は使い次第。海に近いとか設置場所の影響も大きい。
- ・言うべき相手に意見を言わずに回りまわってくるクレームは、当事者でないから対応のしようがない。
- ・昔と違い、注意をしたい人や子どもたちを見かけるとその場で声をかけず、行政関係課に連絡がくる。
- ・地域で解決できる社会がいい。地域に人や物事を繋げる人や仕組みがあることが大切だ。

### 【第四回委員会・公園の禁止事項について】

- ・今どきはボール遊びをしている子を見かけない。ボール遊びはしてはいけないと思っているから、親も公園にボールを持っていかない。
- ・公園の使い方の問題が起きたとき、当事者同士で話し合いができない人もいるので難しい。
- ・注意喚起の曖昧な看板になるか、一律禁止の看板となるか、いいアイデアが生まれるといい。

- ・自治力がある地域では、禁止看板の内容が一律禁止ではなく、「夜間は禁止」など問題解決の為に工夫がみられる内容となる。
- ・火の経験は子どもたちに大切だし、怖さも楽しさも味わせたい。大人の目も大事、火の扱いに慣れてる大人、伝えられる大人が必要だ。
- ・BBQをする場所もないが、それを公園でやりたいという問題になると疑問を感じる。
- ・火を公園で使おうと考えていなかったが、子どもたちが公園で花火をしたいと言ったことがあった。
- ・公園で花火はダメとはなっていない。季節限定で、夜9時までに終われば利用できる。
- ・公園で火を使いたいならば、その理由や思いについてコミュニケーションをとりながらやれるといい。

### 【第五回委員会・委員自身の活動における「つながるための工夫」について、公園雑感】

- ・親と子の遊び場活動：参加者は互いに手助けをし、みんなでやっていくという場になっている。コミュニケーションを大事にしている。食べること、持ち寄りランチでより距離が近くなる。
- ・公園管理活動：プレーパークの良さは年代を超えて繋がれることだと思うので、異年齢のイベントをあえてやる。安心感が持てるようお兄さん的な立場で「葉っぱさん」と名乗り、参加者との距離をつめる。
- ・こども食堂活動：来る人がお互い様という意識、大人も含めて遊ぶ感覚がある。そういう意味では、プレーパークにはお互い様の雰囲気があるが、一般的な公園では迷惑をかけたらいけない空気があり、どうしても子どもは大人に監視・管理される立場になりがちだと思う。
- ・健康維持活動：参加者同士、挨拶は必ずする。活動を共にしながら、些細なことでも口にして共感する。高齢の方でも子どもと一緒に。そしてSNSでつながる。
- ・プレーパークは、みんなが公共を考えながら子どもたちを見ている。公園は家族や親しいグループだけで自分の子だけ見て迷惑をかけてはいけないというプレッシャーも感じる。
- ・常に大人の目が届く範囲しか子どもの居場所がない、アナーキーな場所がないということにもなる。
- ・子どもの権利を理解している大人が少ない。
- ・プレーパークは自由な遊びを欲している大人や子どもたちが集まっているが、一般の公園には、その価値観が通じる人と通じない人がいるかもしれない。指定管理者がいる公園には、第三者がいるということになり、見守る人の存在が安心感につながる。フラットな第三者の存在は鍵になる。
- ・行政のホームページやSNSで多様な市民活動が紹介され始めた。つながるために発信する、見える化するの大事。
- ・貧困の子ども支援をやったときに、社会に必要なのはお節介おばさん、おじさんだという話がでた。



## 活動報告書 2022

発行 2023年3月

発行者 認定NPO法人 浜松NPOネットワークセンター  
〒432-8021 静岡県浜松市中区佐鳴台3-52-23

TEL&FAX 053-445-3717

デザイン ディマス・プラディ